琉球王家ゆかり 沖縄戦で破壊

結ぶ仏縁 仁王を復元

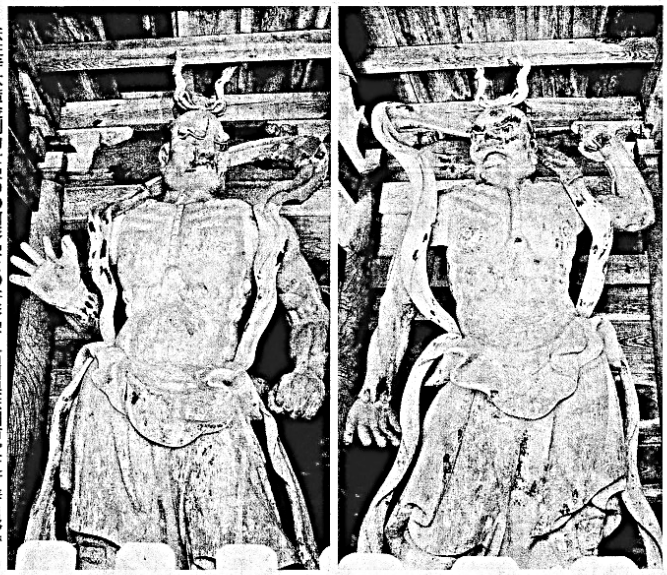
1500キロ先 能登に類似像

沖縄の人々に長く親しまれ、太平洋戦争で破壊された琉球王家の菩提寺・旧円覚寺の仁王像の復元制作事業に、石川県能登半島の古刹に伝わる像が大きく貢献している。沖縄から遠く1500キロ離れた能登。一見するとつながりのない二つの地をつないだものとは――。

旧円覚寺の仁王像を現代によみがえらせようと復元制作が進められていた像＝沖縄県立博物館・美術館提供

旧円覚寺は首里城のそばにあった臨済宗の寺院で、15世紀末に琉球王国の繁栄を築いた尚真王（在位1477～1527年）が創建。1933年には総門や仏殿などが旧国宝に指定された。仁王像は総門に安置されていて、阿形像が「ニオーブトゥキ」、吽形像が「マカーブトゥキ」と呼ばれて人々に親しまれた。

だが、沖縄戦の激しい戦闘で寺の建物は破壊され、仁王像も13個の部材だけが残った。沖縄県は2015年度から琉球王国の文化遺産の集積・再興事業をはじめ、その一環で仁王像も復元されることになった。事業主体は同県立博物館・美術館（那覇市）で、元学芸員の園原謙さん(62)は「総門は首里の人々にとってなじみのある場所。仁王像がかけらのままではいけないとの思いがずっとあった」と話す。



法住寺木造金剛力士像の㊤阿形像と㊦吽形像＝石川県珠洲市宝立町春日野で

仁王像は頭部を含む大部分が失われており、戦禍に遭う前の写真も残されていない。同館は像の特徴から手がかりをつかむため、部材の樹種や年代を調査することから始めた。阿形像の部材4点で室町時代のカヤ材が用いられ、残りは後年の修理に使われたマキ材だったことが判明。カヤは沖縄に自生しておらず県外との関わりが推測された。

さらに調査を進めたところ、使われた木組みの技法や造形の特徴、円覚寺を開いた僧・芥隠が京都出身だったことなどから、平安後期に始まり室町時代に多くの仏像を手がけた仏師の一派「院派」が像の制作者として浮上した。

院派は京都が本拠で室町幕府との関わりが深いとされる。調査の成果から、同館は像が制作されたと考えられる室町時代の姿を目指して復元制作することを決定。全国各地の院派の像を調べる中で注目したのが、1990年代に解体修理された石川県珠洲市の法住寺にある像だった。16年9月、園原さんや、復元事業に関わる長谷洋一・関西大教授、復元制作で中心的な役割を担う一般社団法人「木文研」（東京都）の保存修復家、岡田靖さん(45)＝東京芸大大学院准教授＝らが珠洲市に向かった。

法住寺の木造金剛力士像（仁王像）は解体修理を通じて、1453年に院派の仏師2人が制作したことが確認されていた。珠洲周辺に当時あった荘園「若山荘」を実質的に支配して室町幕府と関係が深かった日野家によって同寺は祈とう所に定められ、栄えていた。佐伯快紹住職(68)の案内で像を確認した一行は「大きさも造形も旧円覚寺の像に近い」と手応えを感じた。

岡田さんは「（旧円覚寺の像の部材で）一番形が残っている左胸部分と比べると、筋肉や内側から盛り上がるような血管の表現が近い」と評価。現存する部材を軸に、法住寺の像なども参考にして欠失部の考察を進めた。長谷教授は「法住寺の像がなかったら取り組み自体が頓挫していたかもしれない」と振り返る。

同館は今回の復元制作について「明治以降の近代化や沖縄戦で失われた文化財や技術をよみがえらせ、継承させる事業の象徴的なもの」と位置づける。岡田さんも「復元は沖縄の人々全体の思い。それに応える像になれば」と話す。

地域に愛された仁王像の思わぬ貢献に佐伯住職は「沖縄から電話が掛かってきた時は驚いたが、役に立てて良かった。完成した像をぜひ見たい」と語る。

復元制作された像は21年度中に公開される予定だ。【深尾昭寛】

2021年6月2日 毎日新聞（夕刊）